2022.
9 月号
第 389号

真宗大谷派京都教区 教化広報誌

# 教区だより

今月の「ことば」

死に別れに
悲しみのない
人生はさみしい

今月の「ことば」は
教区駐在教導が担当しています

Shinran S50th S00th

〈慶讃テーマ〉
南無阿弥陀仏
人と生まれたことの
意味をたずねていこう

CONTENTS

**2面**
「連載」 第16回
悲しみが通じあう時
ー愚禿悲歎述懐を通してー
四衢 亮氏

**3面**
「レポート」
教区同朋会議レポート

**4・5面**
「特集」
青少幼年教化
各組代表者研修会

**6面**
教務所からのお知らせ
イマダカラ

今月号より京都教区内の風景をお届けします。

# 悲しみが通じあう時

## ―愚禿悲歎述懐を通して―

第16回

四衢 亮
（岐阜高山教区不遠寺住職）

末法悪世のかなしみは
南都北嶺の仏法者の
輿かく僧達力者法師
高位をもてなす名としたり

（聖典五〇九頁）

愚禿悲歎述懐では、これまでも「かなしきかなや」と嘆く感情をあらわす表現が二度でてきました。この和讃では、「かなしみは」と憂いや悲哀をもって見つめておられる親鸞聖人が思われます。「南都北嶺」とありますから、その見つめる先には奈良の東大寺や興福寺に代表される諸大寺、比叡山延暦寺に三井の園城寺があったのでしょう。当時を代表するその寺々の仏法者の、「輿かく」「高位をもてなす」の姿を見つめておられるのです。

その高位・高官の僧の輿を担ぐ僧を、「力者法師」と呼んで、それが広く世間一般での呼び名になっていたようです。辞書によると、平安末期以後、髪をそった姿をし、院・門跡・公家・武家などに仕えて力仕事に携わった従者や、輿を担ぎ、馬の口取りをし、長刀を持つなどして主人の外出の供をした者が、力者法師、青法師、力士と呼ばれていたとあります。

仏法の存在を世に示し、世に於いて仏法を証しする存在である「仏法者」の名が、「輿かく」「高位をもてなす」名とされていることに、当時の仏教の姿を見ておられたのです。政治的権威や経済的利権を有する人々や、あるいは武力で世を動かす人々などの高位の存在をもてなし、不殺生の戒がありながら長刀で武装して、それに付き従うあり方が、当時の仏教を象徴していたのでしょう。

その仏教は、「世の盲冥をてら」して政治の歪みや偏りを指摘し問題を明らかにする役割を放棄し、政治権力におもねり、すり寄って、その権力を利用して自らを保つことに躍起になっていたのです。また政治権力の側も、どこまでも仏教を自らの勢力拡大や正当化のために利用するだけで、決して仏教を敬い教えを仰いでいたのではないのでしょう。政治も仏教も自らの本務を見失って、それぞれの個人的利益が何よりの関心事であったのです。

人間に歴史を貫いて呼びかける永遠性や真実性に触れることなく、自分だけの関心事に閉じこもることで、親鸞聖人は「果報ようやくおとろえて　二万歳にいたりては　五濁悪世の名をえたり」と、悪世となると詠われます。

現代においても、宗教団体が政治家に近づき、選挙に人を動員し支援して、政治家を利用しようとする姿が見られます。政治家もまた、宗教団体の教えを吟味することなく無批判に追随し、自らの地位の安泰をはかるのです。その利害が一致した両者は、その団体の宗教性によって苦しめられ悲惨な状況にある人のことなど全く顧みることがないのでしょう。

親鸞聖人がそれを「かなしみ」とされるのは、個人的な正義感からではないのでしょう。「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞」と語られるように、真の教えに知らされたことです。末法悪世の事実をどこまでも知らせる教えに裏打ちされてのことです。教えを私化して利用する人間の問題をどこまでも知らせる「本願のまこと」から問われ、自身の悲しみとされる親鸞聖人がいらっしゃいます。

二〇二一年度

# 教区同朋会議 レポート

出版部会 藤野（ふじの） 顕生（あきお）

五月二十日（金）、真宗本廟視聴覚ホールにて、教区教化委員、教区教化推進本部員、組教化委員長、教区門徒会常任委員を対象に、総勢六十一名参加のもと、教区同朋会議が開催された。教区教化委員会規則の改正を受けて、本年度は新たに教化推進本部員が加わり、また男女共同参画部会が新規に発足するなど新たな教化体制でのスタートとなった。

会議では、教務所長挨拶、教化推進本部長挨拶のあと、各部会および同和協議会の活動報告・活動計画が発表された。

新型コロナウイルス感染の収束が見えない中、様々な事業が中止または規模の縮小、変更を余儀なくされたが、今後は状況を見据えながら対面での研修会・行事等を再開していきたいとの方向性が確認された。一方でオンライン開催を活用することで、従来であれば教区の事業に関わりにくい遠方の方も参加できるなど有意義な面もあったのではという声もあった。

後半は東京教区・首都圏教化推進本部本部員の二階堂行壽氏より「仏事・葬儀は誰のために勤めるのか～真宗の仏事の回復～」というテーマでご講義を頂いた。

近年は葬儀社主導による、宗旨に合わない儀式形態や儀式の簡略化などが多く見受けられる。そういう現状において「真宗の仏事の回復」ということがテーマとして掲げられているが、「回復」といっても単に伝統へ回帰することだけが目的ではないのではないか、そもそも「回復」とは誰から誰に向けられたメッセージなのか、という問いかけをはじめに頂いた。

また、教化ということについて「開教」という言葉で表現できる面があるのではないか、ともお話された。開教というと何もないところから教えを伝えていくという意味であるが、大切なことは、どこまでも教えによって自らが教えに開かれていく、ということであり、そこからしか始まらないのではないか、と。

先生のご自坊では、ご門徒の家の多くはお寺から離れた場所にあり、お参り向かうのに平均一時間から一時間半になるとのこと。中陰の間、七日毎にお参りすることは困難だが、それでも一度は必ずお参りすることを心掛けている、「出向く」ということを大切にしたい、とお話された。

また、ある葬儀社との印象的なお話を紹介された。近年、「式中初七日」（葬儀式の中に初七日法要を入れる形式）とか「一日葬」（通夜を行わない葬儀）といった簡略化した形態があるが「このようなやり方を葬儀社の側から提案したことは一度もない、このようなやり方は全てお寺さん側が提案して始まったものですよ」と話されたそうである。

コロナ下において仏事の簡略化がさらに進んでいるように感じる。仏事に限らず、一度簡略化されたものは中々元の形には戻らないとも聞く。私自身もコロナ下にかこつけて、「こんな状況だから」と楽な方、楽な方を選んでいる気がする。今一度、私にとって真宗の仏事とは何か、というところから見つめ直していかなければならないと強く感じた。

教化推進本部各部会からの報告

二階堂行壽氏による講義の様子

特集　青少幼年教化部会

# 二〇二一年度 青少幼年教化各組代表者研修会

去る五月十四日、第二回となる青少幼年教化各組代表者研修会が開催された。教区教化体制が大きく変わり、担当する私たちも青少幼年教化部会と名を改め、構成員の顔ぶれも変わり、何事も初事となる中での最初の事業であった。

本研修会は、教区内全二十九ヵ組から青少幼年教化を担う者の代表が一堂に会し、「私にとって青少幼年教化とは」をテーマに開催される、講義座談を中心とした研修会である。広域にわたる教区内の人が、それぞれの現場で抱えている課題や苦悩、これまでの経験の中での工夫、アイデアなどの情報を共有することを通して、共に親鸞聖人の教えに学び、教化伝道の歩みを共にする同朋に出遇う事を願いとしている。

講師は、前回に続き、寺澤三郎氏（北海道教区第一三組教證寺住職・北海道教区教化本部長）にお越しいただいた。事前会議等を全てオンラインで行い、研修会の方針や趣旨文の作成などにもご指導を頂きながら準備を進めることができた。

今回、新型コロナの感染状況を見ながら、どのような日程で開催するかの判断に苦労した。第一回は、一泊二日の開催であり、四十名近い参加があった。夜には懇親会を開き、教区会館大講堂一面に布団が敷かれ、夜遅くまで熱気ムンムンの時間を過ごすことができた。

しかし、今回は人数制限を設け、宿泊・懇親会をあきらめ、一日だけの開催とせざるを得ない状況であった。オンライン開催という意見もあったが、普段なかなか会わないからこそ、直接交流ならではの熱量を感じたいと、顔と顔を合わせて対面で行うことにこだわった。当日は無事に対面で開催することができ、十三ヵ組十四名の方にご参加いただくことができた。

寺澤氏の講義は、『親鸞聖人御消息集』をもとに、真宗の教化活動の内容と、共同教化の必要性・重要性について重点的にお話をいただいた。

私は、「教化する者、される者」というところに、気が付くと立ってしまっている。特に主催者側にいる場合は色濃く「教化する者」になる。「いい場にしたい」と心から思えば思うほど、今回の開催形態に不満が募り、前回と同じように開催したい、それなら参加してよかったと思ってもらえると妄信していた。「私にとって」が抜け落ちて、教化の場を作るのは私、参加者は教化される者というところに立つ私にハッと気づかされた。テーマにあるように「私にとって」という事を抜きにして「教化」というのは成り立たない。どのような形の開催であれ、できたか、できなかったかによって評価されるのではなく、すべてがベストなのだろう。この場は、教化伝道の現場で苦悩する者同士が出遇い、共に課題を見出し、励まし合いながら自身の歩みを確かめる場であり、主催する者も、参加する者も、共に如来の教化によって歩みをすすめる朋である。「私にとって」の歩みは「共に」という事なしには、開かれてこないように思う。本研修会が、「私」という一人の青年教化の場であったことに間違いはない。

青少幼年教化部会 副主査 仁科（にしな） 洸（こう）

講師の寺澤三郎氏

班別座談の様子

**「教化とは、まずやるんだ。動くんだ。やってみればわかる」**

講師の寺澤氏が力強く話された。その言葉に「あなたのやり方で、やればいいんだよ」と、励まされた気がした。

昨年度より、研修会の企画に携わり、当日は司会進行を務めた。今まで子どもたちと関わる仕事をしてきた私にとって、部会員としての活動は、自らの生きる姿勢を問われているようにも感じている。私が自分自身を縛っていたココロへの気付きもあった。

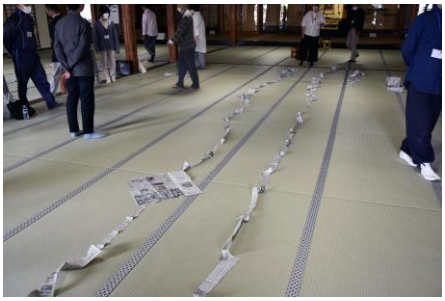
今の子どもたちを取り巻く環境は、グローバル化や知識基盤社会の進展、少子高齢化、親の価値観の多様化など、急激に変化している。そのような状況の中、次代を担う子どもたちが明るい未来を切り拓いていくためには、社会の変化に対応し、心豊かに生きることが重要である。

豊かな心を育てていくこと。それは、自然体験活動や様々な人々との交流活動から学び、その経験を通して身に付けることではないだろうか。しかし、子どもたちを見守っていく大人世代が、失敗を恐れ、弱音が吐けないような辛さや生きにくさを抱えていることも確かである。

先輩方が今まで培ってこられたものを辿りながら、お寺がどの世代にも身近な存在であるために何ができるかを考えていきたい。研修会を通して、人との出会いや繋がり、話すことの楽しさや大切さを再認識した。

たった一枚の新聞紙のゲーム。あの日、大寝殿で「全力で遊ぶ」参加者の笑顔が忘れられない。

**青少幼年教化部会 上寺（かみでら） 恵美（めぐみ）**



**実践アイスブレイクの様子**

## 参加者の声

今回、初めて「青少幼年教化各組代表者研修会」に参加するご縁をいただき、「青少幼年教化」について考えることができました。

「青少幼年教化」と聞くと、子どもたちがお寺に集まり、仏教に触れつつ、様々な活動をする、というイメージを持っていました。実際、スタッフの方の事例紹介があり、なるほどと思いました。また、実践アイスブレイクでは、新聞紙を使って様々な遊びをしました。大人でも楽しめるのだから、子どもたちはさぞかし楽しいだろう、と実感しました。

しかし、その後、班別座談の中で出た話題において、私の中で抜け落ちていた視点を与えられました。それは「青年」に対する教化についてです。

右記の子どもたちについては、いわば「少幼年」に当たります。それに対して、十代、二十代に当たる「青年」に対する教化はどういう形のものなのか。親と一緒に来てくれる「少幼年」に対して、自立している「青年」に、私たちはどのようにしてはたらきかけていけば良いのか。「青年」は様々な悩みを抱えていますが、私たちはそれについて、どうすれば応えられるのか。私自身、まったく考えていなかったことであり、とても重要な視点だと受けとめました。

最後の講義で、寺澤三郎先生は「人間の課題を伝え共に歩むということが、我々にできる唯一の「教化」ということなのです」とおっしゃいました。「青年」と共に歩むことも考えていかなければなりません。

**山城第二組 法泉寺 井上（いのうえ） 至（いたる）**

## 教務所からのお知らせ

**《経常費の早期完納について》**

経常費の早期完納締切期日は二〇二二年九月三十日（金）です。

なお、本廟部（参拝接待所）で相続講金（真宗本廟収骨）、読経志（永代経・申経）等を直接納金された場合は、各寺の御依頼額には算入されません。予め教務所を通してお手続きください。

郵便振替による送金の場合の口座番号・加入者名は左記の通りです。

・口座番号　００９６０－８－１８９６７

・加入者名　真宗大谷派京都教務所

※払込用紙（振込料教務所負担）をご希望の方は、教務所までお申し出ください。

**《教務所員の異動について》**

六月二十九日付で日野隆文所長が、教育部長として異動となり、篠岡誓法所長（前教学研究所事務長）が着任いたしました。

なお、篠岡誓法所長は、大津別院・山科別院・伏見別院の輪番を兼務いたします。

また、八月一日付で佐々木大駐在教導が四国教区駐在教導として異動となり、赤松崇麿駐在教導が着任いたしました。

**《教務所事務休暇のお知らせ》**

九月二十七日（火）を教務所整理の為、事務休暇とします。教務所は開所しておりますが、事務の取り扱いはございませんのでご注意ください。

## イマダカラ

「猶存在耶（ゆぞんざいや）」。『観無量寿経』のこの言葉に幾度振り返らせてもらったことだろうか。

この阿闍世の言葉は、直訳すれば「今になお存在せりや」、現代語に直せば「まだお元気なのか？」という意味だろう。ご存知のように父王である頻婆娑羅王を２１日間に渡って食べ物を与えず幽閉していた状況で発せられた言葉は「あまりにもむごい」とある先生がおっしゃっていたのを思い出す。殺すつもりで幽閉したにもかかわらず「まだ父王はご存命（お元気）なのか」と部下に問う、その姿勢に人間の醜い姿の根源を見ておられた。自分の手は汚したくない、しかし邪魔なものは消えてほしい。２６００年前の出来事だが現代に通じるのではないかと。たとえば介護に疲れはてた家族はこの様な思いをするのでないか、と問われたのを覚えている。

この阿闍世の言葉の世界観は介護問題だけでなく、日常大なり小なり様々な場面で身近にある。たとえばレジの長い順番待ち、たとえば運転中に理不尽な割り込みを受けたとき、自分の前から居なくなってくれればいいのにと思うことは多々ある。そんな時には自分自身が阿闍世と同じ気持ちを抱いていることに気がつかない。しかしこの言葉を思い出す時に「ああ、また自分中心に世界を見てしまっていたなあ」と今もなお自分を問う言葉となってくれている。

（出版部会　蒲池 義圭）

## 編集後記　the editor's note

『教区だより』の編集に携わるようになってから、約１年になる。

編集の主な仕事として、原稿のチェックがある。誤字・脱字を見つけることは分かり易いが、文章の表現の仕方、漢字の使い分けに関しては執筆者に確認しなくてはならない。執筆者の意図が重要だからである。世間では最近、議論になる表現として「コロナ禍・コロナ下」「障害・障碍・障がい」等がある。私たちはどのような意味があって、このように使い分けられているのかをしっかりと理解できているだろうか。意味も分からずに形だけの使い分けでは、不十分なのである。

お念仏の教えについても同様である。「いわれを聞く」ことが大切なのである。いわれを聞いていくことによって、その意味がはっきりとしてくる。

この基本的な姿勢を忘れずにいきたい。

（出版部会　井上 至）

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌
『教区だより』 第３８９号
発行人 篠岡　誓法（真宗大谷派京都教務所長）
発行所 真宗大谷派京都教務所
〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入
Tel：075(351)5260　Fax：075(351)5256

発行日 ２０２２（令和４）年９月１日
メールアドレス：kyoto@higashihonganji.or.jp
真宗大谷派京都教区ホームページ
京都教務所　検索